

HLA-B52 allele in giant cell arteritis may indicate diffuse large-vessel vasculitis formation: a retrospective study

久志本, 和郎

<https://hdl.handle.net/2324/4784521>

出版情報 : 九州大学, 2021, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :

権利関係 : (c) The Author(s). 2021 Open Access This article is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

(別紙様式2)

氏名	久志本 和郎
論文名	HLA-B52 allele in giant cell arteritis may indicate diffuse large-vessel vasculitis formation: a retrospective study
論文調査委員	主査 九州大学 教授 石神 康生 副査 九州大学 教授 筒井 裕之 副査 九州大学 教授 園田 康平

論文審査の結果の要旨

申請者らは高齢発症大血管炎 (elderly onset large-vessel vasculitis, EOLVV) 患者で新たな特徴を有する患者群をHLA遺伝子型、リウマチ性多発筋痛症、FDG-PET/CTでの集積や罹患血管病変数に着目して同定することを目的として研究を行った。FDG-PETの視覚的評価、発症時年齢、側頭動脈炎の有無、リウマチ性多発筋痛症の有無で複数のグループに分類し、グループ間でHLA遺伝子型を比較した。FDG-PET/CTで同定された罹患血管病変に基づいて階層型クラスター解析を行い、類似した特徴を有する患者集団の同定を行った。新たに同定された患者集団について、その臨床的特徴とFDG-PET/CT画像所見について調べた。HLA-B52陽性患者において、従来の巨細胞性動脈炎や高安動脈炎に属しないunclassified EOLVVでリウマチ性多発筋痛症を有するものは、巨細胞性動脈炎による大血管炎と近縁する疾患であることが示唆された。これらのHLA-B52陽性で巨細胞性動脈炎の特徴を有する大血管炎患者 (リウマチ性多発筋痛症 and/or 側頭動脈炎を合併) はHLA-B52の陽性高安動脈炎と比較してFDG-PETでの集積が高く、罹患血管数が多く、生物学的製剤使用率や再燃率が低いという臨床的特徴が認められた。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。。なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士 (医学) の学位に値すると認める。